

# 薄播き苗による良質米の安定多収技術の確立

## 1. 試験のねらい

最近、中成苗を用いた薄播き苗の栽培が多くみられるようになったが、早植での薄播き苗の栽培法は充分確立されていない。そこで、薄播き苗の特徴を活かした、安定多収栽培法を確立することを目的として、コシヒカリについて試験を実施した。

## 2. 試験方法

昭和63～平成元年の2か年、農試水田（厚層多腐植質多湿黒ボク土）において、コシヒカリの薄播き苗（乾籾60g/箱）で育苗日数40日、葉齢3.6～4.0の苗を5月10日に移植した。基肥窒素を0.2～0.6kg/a、初期追肥（移植後8日）0.2～0.4kg/aの有無について検討した。

## 3. 試験結果および考察

- (1) 薄播き苗は稚苗と比較して同じ基肥量でも倒伏がやや多く、総籾数は多くなったものの収量は同程度であった。また、基肥量が少ない場合には倒伏は軽くなるものの、穂数が少なくなることによって総籾数が減少し、収量はやや向上したが充分でなかった。
- (2) 初期追肥によって、茎数は無施用に比較して分けつ開始から多めに推移した。穂数も初期追肥の施用によって同様の傾向となり、総籾数の増加によって収量が向上した。また、倒伏程度は初期追肥による稈長の伸びは小さいのでさほど増加しなかった。
- (3) 薄播き苗の分けつの発生割合を節位ごとに見ると、稚苗と比較して第2節では少ないが、3節以降の2次分けつは多かった。また、上位節の分けつは薄播き苗で有効化する割合が高く、また、全節の穂の一穂着粒数が多かった。初期追肥によって下位節の分けつ速度が早まることと、いずれの節も分けつ及び穂数が増える傾向がみられた。
- (4) コシヒカリの薄播き苗の栽培では、基肥窒素量をやや控えめにし、初期追肥を施用することで、倒伏を重くせず収量が安定する。

## 4. 成果の要約

薄播き苗利用による、コシヒカリの安定多収技術について検討した。その結果、基肥窒素量をやや控えめにし、初期追肥を施用することによって、倒伏を重くせずに籾数を確保することができ、収量は安定する。

（担当者 作物部 青木岳央）

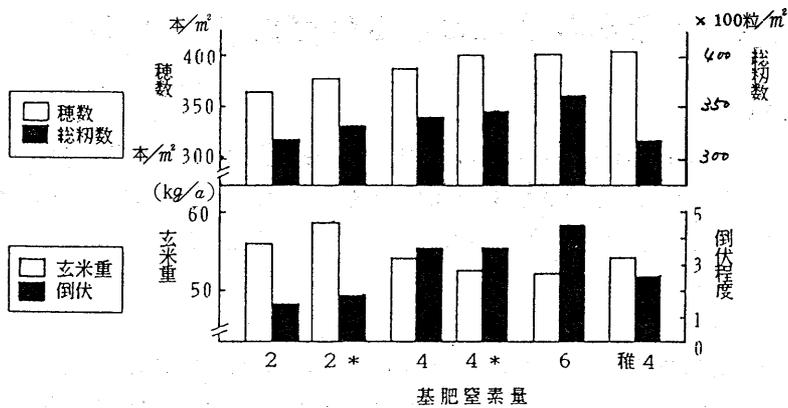


図-1 初期追肥における穂数・総もみ数及び玄米重・倒伏程度(昭63)

注. 初期追肥 0.2 kg/a

表-1 初期追肥における収量構成要素及び倒伏程度(平元)

処 理 条 件	稈長	最高 茎数	穂数 /m <sup>2</sup>	一 穂 粒 数	総 粒 数 ×100/m <sup>2</sup>	登熟歩合 %	千粒重 g	玄 米 重 kg/a	倒 伏
2-0	83	513	307	95.8	294	87.0	21.9	56.0 (101)	0.8
2-2	84	545	319	94.3	301	87.3	21.8	57.0 (103)	1.3
2-4	86	595	340	95.5	325	85.0	21.8	60.0 (109)	1.8
4-0	86	621	355	93.1	331	81.5	21.4	57.5 (104)	2.7
4-2	88	692	378	91.9	348	78.7	21.2	57.8 (105)	3.2
稚 苗	86	724	387	84.6	327	79.1	21.3	55.2 (100)	3.5

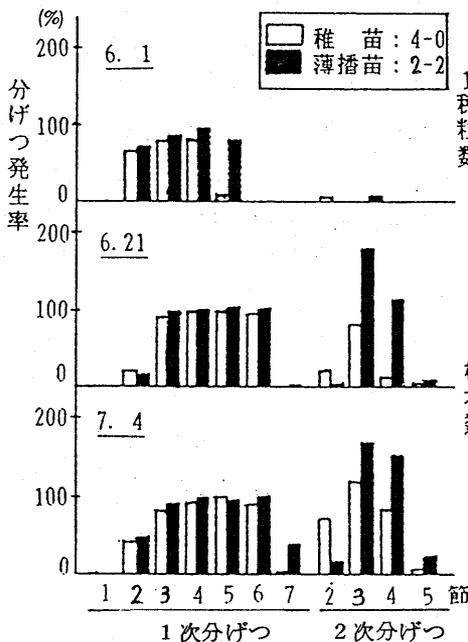


図-2 節別別の分けつ発生率(平元)

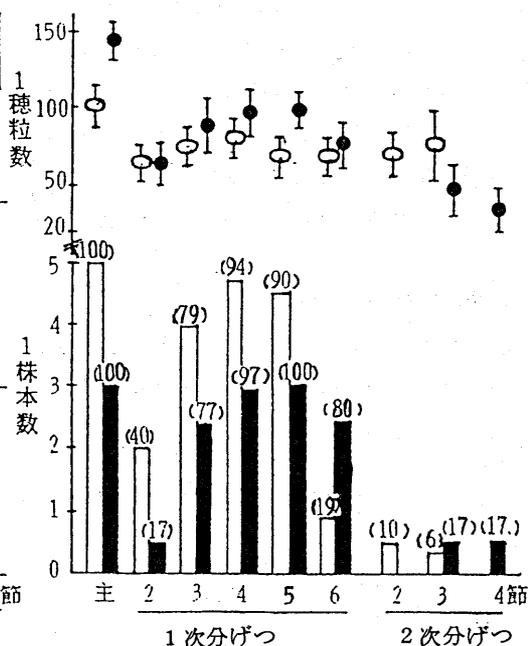


図-3 節別別の1株穂数及び1穂粒数(平元)

注. ( )は穂数の割合